

羅生門

一名

綱

觀世小次郎作

前

ワキヅレ 源頼光

ワキ 渡辺綱

ワキヅレ 藤原保昌

ワキヅレ 其他一同

後

ワキ 前に同じ

シテ（謡なし） 鬼神

季は 春

地は 山城

「治まる花の都とて。く。風も音せぬ春べかな。

「是は源の頬光とは我事なり。さても丹州大江山の鬼神を従へしより以来。貞光季武綱公時。此人々と日夜朝暮参会申し候。殊更このほどは。晴間も見えぬ春雨にて候ふ程に。酒を勧めばやと存じ候。サシ「有難や四海の安危は掌のうちに照らし。百王の理乱は心のうちに懸けたり。

地「曇りなき。君の御影は久方の。く。空ものどけ

き春雨の。音も静に都路の。七つの道も未すぐに。八洲の浪もおとせぬ。九重の春ぞ久しき。く。

「いかに面々。さしたる興も候はねども。此春雨の昨日今日。晴間も見えぬつれぐに。今日も暮れぬと告げ渡る。声も淋しき入相の鐘。

地「つくぐと。春のながめの淋しきは。く。忍ぶ

につたふ。軒の玉水おとすごく。独ながむる夕まぐれ。伴なひ語らふ諸人に。御酒をすゝめて盃を。

とりぐなれや梓弓。弥猛心の一つなる。つはものゝ
交はり。頼みある中の酒宴かな。

クセ
「思ふ心のそこひなく。唯うちとけてつれぐと。

頼光
「降り暮らしたる宵の雨。これぞ雨夜の物語。

頼光
「しなぐ言葉の花も咲き。匂ひも深き紅に。面も
めでゝ人心。隔てぬ中の戯ぶれば。面白や諸共に。
近く居よりて語らん。

頼光詞
「あまりに淋しき夜にて候ふ程に。皆々近く寄つて

御物語り候へ。

ワキ詞
「畏つて候。仰せにて候ふ程に。皆々近く御参り候
へ。

頼光
「いかに申し候。此程めづらしき事はなく候ふか。

保昌
「さん候此頃不思議なる事を申し候。九条の羅生門
に鬼神の住んで。暮るれば人の通らぬ由を申し候。

ワキ
「いかに保昌筋なき事なたまひそ。さすがに羅生
門は。都の南門ならずや。土も木も我大君の国な

れば。いづくか鬼の宿と定めんと聞く時は。たとひ鬼神の住めばとて住ますべきにもあらず。かゝる麿忽なる事を仰せ候ふぞ。

保昌
「さては某詐を申すと思しめし候ふか。此事世上に隠れなけば申すなり。まこと不審に思しめさば。今夜にてもあれ彼門に御出であつて。誠か偽か御覧候へ。

ワキ
「さては某参るまじき者と思しめされ候ふか。其義

にて候はゞ。今夜かの門に行き。誠か偽かを見候ふべし。しるしを賜はり候へ。

ツレ
「満座のともがら一同に。是は無益とさゝへたり。
ワキ
「いや保昌に対し野心はなけれども。一つは君の御為めなれば。しるしを給べと申しけり。

「げにくく綱が申すごとく。一つは君の御為めなれば。しるしを立てゝ帰るべしと。札を取り出で給びければ。

「綱はしるしを賜はりて。

地 「綱はしるしを賜はりて。御前を立つて出でけるが。立ち帰り方々は。人の心を陸奥の。安達が原にあらねども。こもれる鬼を従へずは。二度又人に。面を向くる事あらじ。是までなりや梓弓。引きはかへさじ武士の。やたけごゝろぞ恐ろしき。く。

(中入)

「さても渡辺の綱は。唯かりそめの口論により。鬼

神の姿を見ん為めに。物の具取つて肩に掛け。同じ毛の兜の緒をしめ。重代の太刀を佩き。

地 「たけなる馬に打ち乗つて。舍人をもつれず唯一騎。宿所を出でゝ二条大宮を。南がしらに歩ませけり。春雨の。音も頻りに更くる夜の。く。鐘も聞ゆる曉に。東寺の前を打ち過ぎて。九条おもてに打つて出で。羅生門を見わたせば。物冷ましく雨落ちて。俄に吹きくる風の音に。駒も進まず高いな、

きし。身ぶるひしてこそ立つたりけれ。

「其時馬を乗り放し。く。羅生門の石壇にあがり。

しるしの札を取り出だし。壇上に立ておき帰らん

とするに。後より兜の。錘をつかんで引き留めけれ

れば。すはや鬼神と太刀抜き待つて。切らんとす

るに。取りたる兜の緒を引きちぎつて。おぼえず

壇より飛びおりたり。かくて鬼神は怒りをなして。

く。持ちたる兜をかつぱと投げ捨て。其長衡門

の軒にひとつしく。両眼月日の如くにて。綱をにらんで立つたりけり。

「綱はさわがず太刀さしかざし。

ワキ

「綱はさわがず太刀さしかざし。汝知らずや王地を侵す。其天罰はのがるまじとて。かゝりければ。

鉄杖を振りあげえいやと打つを。飛び違ひいちやうと切る。切られて組みつくを。払ふ剣に腕打ち落とされ。ひるむと見えしがわきつぢにのぼり。虚

空をさして上りけるを。慕ひゆけども黒雲おほひ。
時節を待ちて又取るべしと。呼ばゝる声もかすか
に聞ゆる。鬼神よりも恐ろしかりし。綱は名をこ
そ揚げにけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第四輯」大和田建樹著